

縦断的会話における話題と対人関係構築過程との関連性
—相手言語接触場面と第三者言語接触場面における会話を対象に—

ぼく かんしん
莫 冠シン（早稲田大学大学院生）

1. 研究背景と目的

グローバル化の進行により、母語が異なる人と接触することは珍しくなくなる。違う文化背景を抱える人々とコミュニケーションを通じて、どのように対人関係を築き、さらに維持するかが重要な課題になっている。そのような問題意識に基づき、本研究では、相手言語接触場面と第三者言語接触場面の会話を対象に、話題に着目して縦断的に分析することにより、接触場面における話題と対人関係構築過程との関連性について検討する。

2. 研究概要

本研究は、同じ大学院に所属する大学院新生を調査協力者として、母語が異なる日本語話者を 2 名 1 組で月に一回の会話をしてもらい、会話後全員にフォローアップインタビュー（以下：FUI）を実施し、7 か月間に渡り計 6 回の調査を行った。本発表では、対人関係の進展方向が違う 2 ペア（相手言語接触場面ペア S-W と第三者言語接触場面 C-L）を取り上げて、話題に着目してそれぞれのペアの対人関係構築過程を分析した。分析にあたっては、三牧（2013）の「話題」の定義を参照し、宇佐美（2019）の発話文認定基準も併せて話題区分を行った。それから、FUI データを加えて接触場面对人関係の構築過程と話題との関わりについて考察する。

3. 結果

対人関係構築の初期段階においては、両場面ともに話題の選択に関して共通点から始まることが分かった。これは三牧（2013）の初対面会話における話題選択戦略と一致しており、共通点を見つけることは対人関係の進展に積極的な役割を果たすことが明らかになった。しかし、会話を重ねることにつれて、両ペアの対人関係の進展方向は異なり、話題選択の戦略にも相違が見られた。

ペア S-W は、会話を重ねる中で、相手との関係が親密になった。それにより個人的な話題の共有が多くなり、さらに話題について深掘りすることによりできるようになり、自らネガティブ・フェイスを開示する場面も観察された。一方、ペア C-L は、会話を重ねても関係性の深化が進まず、誘いの話題を回避したり、個人的な話題に触れないように意識的に選び、共通性の高い話題に焦点をあてている様子が窺えた。

参考文献

- 宇佐美まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則（BTSJ）2019 年改訂版」＜<https://ispl.ad.jp/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf>＞（2024 年 7 月 12 日閲覧）
- 三牧陽子（2013）『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版